



和牛一貫肥育化についての考え方

1. はじめに

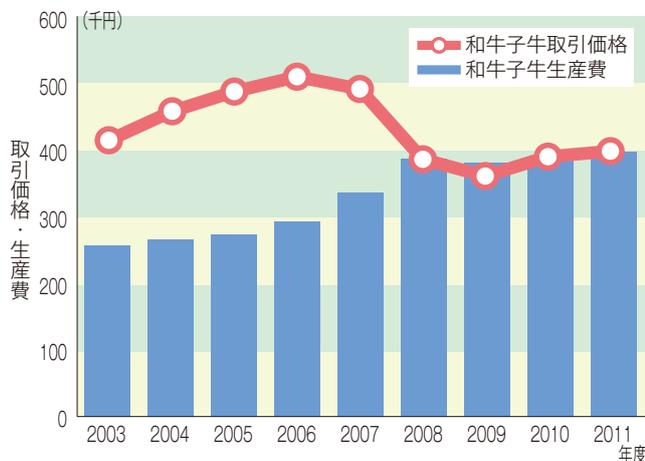
和牛肥育農家（素牛導入）の経営状況は、飼料を主とした資材高による生産費増と枝肉相場低迷による販売額減により、年々厳しさを増している。特に生産費の6割近くを占める素畜費は経営に大きな影響を与えるため、この素畜費を安定的に、かつできる限り抑えることができれば、乱高下する和牛素牛相場に左右されない、強い肥育形態を確立することが可能になる。このために自ら繁殖雌牛を保有し、自家産素牛を肥育する一貫肥育化が推奨されているが、今回はこの一貫肥育化により期待される効果と注意点を示しながら、和牛一貫肥育化についての考え方について整理する。

2. 期待される効果

① 素畜費の安定化と価格抑制

和牛子牛の生産費は25～35万円程度と推定される。素牛相場が下がるとメリットは少なくなる可能性もあるが、中長期的にみると十分メリットはあると考えられる。

図1：和牛子牛生産費と取引価格の推移



農林水産省農業経営統計調査（生産費は家族労働費を除く）

② 移動ストレスによる体重目減りの解消

一貫経営ならば素牛市場から農場までの移動にともなう体重目減りが発生しない。さらに素牛導入後の飼い直しも発生しないため、肥育月齢短縮につながる可能性がある。

表1：市場導入牛の体重目減り（和牛去勢、雌）

	頭数(頭)	上場体重(kg)	農場着体重(kg)	目減り体重(kg)
鹿児島	256	290	261	-29.1
宮崎	72	282	253	-28.3
長崎	8	283	255	-28.5
平均		288	259	-28.9

体重はすべて平均値

全農笠間乳肉牛研究室（2005～2008年）

③ 枝肉成績の向上

自家産素牛は自ら育成を行うため、腹作りを重視できる点および育成期からビタミンAコントロールが可能になる点の2点より肥育成績の向上が可能になる。

	市場導入牛(528頭)	自家産牛(190頭)
出荷体重(kg)	776.4	771.8
枝肉重量(kg)	497.7	491.1
上物率(%)	68.0	75.3
ロース芯面積(cm ²)	57.6	58.2
バラ厚(cm)	8.2	8.2
皮下脂肪厚(cm)	2.3	2.4
BMS	6.3	6.7
BCS	3.9	3.7

すべて平均値

全農笠間乳肉牛研究室（2003～2009年）

3. 注意点

前述した効果を発揮するには、以下の2点に注意する。

① 繁殖雌牛の1年1産

繁殖雌牛を確実に1年1産させ、優良な子牛を生産することが重要である。社団法人全国和牛登録協会の調査によると、2011年の分娩間隔は平均415日と、1年1産を示す365日には及ばないため、発情発見補助器具の活用などによる分娩間隔の短縮が必要である。

② 子牛の事故率低減

生産された子牛を事故なく健康に育てることが重要である。家畜改良センターHPのデータより計算すると、和牛子牛（6カ月齢未満）の事故率は約4%となる。事故率が高くなれば、結果として素畜費を押し上げてしまう要因になってしまうため、*早期母子分離などを積極的に導入し、事故率低減することが必要である。

4. まとめ

和牛一貫肥育化は、繁殖雌牛の1年1産と子牛の事故率低減を実現することができれば、そこから得られるメリットは大きい。初期投資が大きいことや子牛生産までの期間が長いことから遠い道のりのように思えるが、最初は数頭の繁殖雌牛から開始し、生まれた雌牛を自家保留し、徐々に拡大を進めていくことも可能である。全農グループとしても、「和牛一貫肥育化による収益性の向上」をテーマとした技術マニュアルを作成し、現場における技術支援を強化しているため、興味のある生産者の方はぜひ参考にさせていただきたい。